第 78 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

連携協定締結記念シンポジウム開催

弘前学院大学学長　吉岡　利忠

２０１９年（令和元年）５月15日（水）青山学院大学と弘前学院大学との間で連携・協力に関する協定が結ばれ、学内外に広報されたことは記憶に新しい。青山学院大学と本学との関係は、大学案内、多くの書籍、歴史書、報告書などに見られるように、プロテスタント・メソジスト派を背景にした教育機関であり、両学院とも百数十年の歴史を持つ。本学の学祖本多庸一（青山学院第２代学院長）、阿部義宗（同６代学院長）および笹森順三（同７代学院長）はともに弘前市出身であり青山学院の歴史を刻んだ先人たちであり本学として誇りとするところである。

協定では、今後、両大学間で学術・研究および学生の交流にむけて相互に連携・協力していくことが確認された。先ず第１回目としてその記念シンポジウムを企画し11月22日（金）に本学礼拝堂で開催された。記念シンポジウムの副題は、～若者の地域おこし～、とした。ポスター作製もされ（本学社会福祉学部３年生増田侑奈）、シンポジウムの内容はプログラムに示されているようにかなり充実したものになった。青山学院大学からはコミュニティ人間科学部鈴木眞理学部長、記念講演演者の安斎聡子准教授、シンポジストの大木真徳准教授（２０２０年度より）であった。

安斎准教授は文化資源を活用した地域振興や質的心理学の立場からコミュニティにおける記憶の継承について基本的な知見を紹介し、大木准教授は地域社会が抱えるさまざまな問題を解決するうえで社会教育の重要性および博物館など社会教育施設の果たす役割について述べていた。本学社会福祉学部一年生の原田祐貴君は農業と福祉（農福連携）について岩手県にある施設を通して考察し、本学同学部丸山龍太講師は本学３学部で積極的に進められている多くの地域・社会貢献についてまとめ、地域おこし活動家の氣仙修氏は地域に特化した滞在型観光プランや地域ベンチャー留学生の募集と活動を通して地域で働く魅力を発信していた。行政事業関係の野口拓郎氏は総務省事業の地域おこし協力隊の活動を紹介し、集落支援、若者が主体的に取り組もうとする地域づくりなどについて述べ、５人のシンポジストはそれぞれの立場から貴重な経験、意見、対応、将来構想などを熱く語り、質疑討論もあり約70名の参加者は充実した時間を過ごした。

次回は青山学院大学で開催予定であるが、現在、その計画が進められている。一つには弘前学院大学および青山学院大学の学生を中心としたイベントは両大学の学生や教員にとり極めて有意義であろうと考えている。

中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院
理事長・学院長　阿保　邦弘

十二「教育改革の行方」

『激震』

昨年の十一月一日、教育界に激震が走った。

新年度入試から導入される予定だった、英語の民間試験が延期となったからである。

今まで準備してきた高校二年生の衝撃は、並大抵のものではなかったに違いない。

対策に頭を悩ませてきた高校教員の戸惑いも、いかほどのものだったか想像に難くはない。

本学の場合は、新入試制度に関して他に先駆けて数年前から取り組んできた。

全国規模で実施を予定していた英語民間試験は、英文科のある本学にとって英語教育を一層充実させるための足掛かりとなるはずだった。

その混乱が収まらないうちに、十二月十七日には記述式問題の白紙撤回が決定した。

記述式問題では、知識のみに偏らない思考力、判断力などを測る内容が出題される予定であった。

複数の問題文や資料を読み比べ、実験、観察の場面に基づいて図表を分析するという画期的な試験である。

プレテストでは意欲的な出題傾向が維持されていただけに、記述式問題の廃止が教育関係者に与える影響は大きい。

撤退を決めざるを得なかった文科省では、各大学で個別に対応するようコメントしているが、それには自ずと限界がある。

日本語・日本文学科を要している本学では容易だが、それ以外の大学では対応に苦慮しているに違いない。

何れにしても、ここ数か月で新入試制度の二本柱はもろくも崩れさった。

高大接続改革の目玉だっただけに、まるで新入試制度そのものが消失してしまった感がある。

しかし、入試改革の根幹そのものが無くなったわけではない。

各大学のアドミッションポリシーに添って、入学者の学力の３要素を総合的・多面的に評価することには変わりない。

偏差値重視型入試からの脱出を図る絶好の機会であり、長年の入試への不信感を払拭するチャンスでもある。

従来の筆記試験による１点刻みの成績ではない、高校時代の成績や活動実績を多面的に評価する新入試への期待は大きい。

ところが、今になって全国的には新入試に対して後ろ向きになっている大学が増加しているという。

本学でも、少数ではあるが従来の入試内容に留めるべきだという意見もある。

しかし、何度も述べてきたが激動の時代はすぐ目の前に迫っている。

日本では、人口減少による高齢化社会の出現、グローバル化や第４次産業革命と呼ばれる技術革新による社会変化が現実に訪れている。

世界規模では、人口増加による食糧問題や環境破壊による天災の増加が急増してる。

また、それを起因とする世界的な経済混乱や戦火の拡大等、一刻の猶予も許されない状況であると言ってよい。

人類の危機ともいう混乱を前に、従来依然とした教育でよしとする大学であっては、怠慢の誹りは避けられない。　（つづく）

2019年度 クリスマス礼拝と音楽の夕べ開催

12月12日、大学礼拝堂において、クリスマス礼拝が行われました。多くの教職員・学生が集い、厳粛な雰囲気の中、パイプオルガンや清らかなハンドベルの音に包まれながら、キャンドルを灯し、本学宗教主任の楊尚眞先生より「イエスという神のプレゼント」と題してメッセージをいただいた。共にイエスキリストのご降誕を賛美し祝うことができました。

また、この夜６時30分より、第20回目の「クリスマス音楽の夕べ」が開催されました。

初めに、ハンドベルの独奏、新しい試みとして、清らかな音色のハンドベルと荘厳なパイプオルガンの音色が合奏し、音楽会の幕が開きました。楊尚眞宗教主任が聖書朗読と祈祷をされ、第一部は、竹佐古真希さんによるパイプオルガンの独奏と続き、鎌田伸爾さんによるバリトン独唱、「神の御子がお生まれになった」他を、フランス語で情感溢れる歌声で聴衆を魅了しました。続いて、コール・コモードの女声合唱による、クリスマスの讃美歌１０６番「荒野の果てに」他を素晴らしいハーモニーでしっとりと歌い上げました。

第二部は、齋藤龍矢さんによるオーボエの独奏、「映画音楽」３曲を演奏し、歌っているかのようなその素晴らしい演奏に感動し、続いて、「アヴェ・マリア」ほか、バリトン独唱の歌声に魅了され、再び、女声合唱コール・コモードが、笹森建英作曲「美しい白神」ほかを、美しい歌声で歌い上げ、聞く者の心を優しく包み、心地よい演奏会となりました。

音楽会の最後には、礼拝堂いっぱいの聴衆の皆様と共に「きよしこの夜」を賛美し、イエス・キリストのご降誕を共にお祝いしました。この音楽会にご出演・ご協力をいただきました皆様には心より感謝申し上げます。

（宗教部）

2019年度

弘前学院大学学位記授与式

文学部	第46回
社会福祉学部	第18回
看護学部	第12回
大学院社会福祉学研究科修士課程	第16回
大学院文学研究科修士課程	第14回

◇**日時**：2020年３月14日（土）午前10時～
◇**場所**：弘前学院大学体育館

卒業記念礼拝

◇**日時**：2020年３月13日（金）午前10時～
◇**場所**：礼拝堂
＊礼拝終了後、体育館において
学位記授与式のリハーサルを行う。

研究紹介㊻

〈癖のある言葉〉を拾い集める

文学部　日本語・日本文学科　教授　鎌田　学

数年前、機内で何気なくビジネス誌をめくっていたところ、次のような主旨の文言に出会いました。「ビジネスパーソンは哲学を知らないと、グローバルなビジネスの場では恥をかく。」ここでいう「哲学」とは、個人のもつ人生哲学あるいは所属する会社の経営理念の意味ではなく、ソクラテス以前のタレースから『正義論』のロールズまでを含む西洋哲学全体の知識を指しているようです。この記事を書いた人がどのような経歴の人物かは皆目見当がつきませんが、いくつかの前提があるように思いました。まず、「グローバルなビジネスの場」で日本人ビジネスパーソンが相手にするのは、「西洋」として括られる国々の人たちであること。第二に、「西洋」出身ではない外国人ビジネスパーソンもまた、「西洋」的教養を身に着けていること。現代のビジネスパーソンたちはこのようなグローバルな時代の中で生きている、というのです。

もしこの記事の内容が真ではないにしても〈真らしい〉とすれば、私も「グローバルなビジネスの場」で十分活躍できそうな気がします。なぜなら、私の専門フィールドであるハイデガーこそ、西洋哲学の全体を大胆に鳥瞰し、そこに「存在忘却」を見出した稀有な、しかし今日では世界中にあまたの亜流を生み出した哲学者であるからです。私は〈全体を見る〉こうした彼の姿勢に魅力を感じます。

さて、私の授業である「哲学と倫理B」では、哲学者の翻訳された、ある程度まとまった文章を履修者に読んでほしいと考えて、解釈を中心としたプレゼン形式を採っています。普段目にするネットスラングや、他の学問領域で使用される言葉と違う、とても癖のある言語ですが、意味内容豊富なぶん週の担当者はやりがいを感じているはずです。前年度は18世紀のカント『永遠平和のために』、今年度は19世紀のJ・S・ミル『自由論』を取り上げました。いずれも西洋哲学史上の名著であるだけではなく、現実の社会のあり方も大きく変えた影響力のある書物です。前者の構想は1920年の国際連盟成立へとつながりました。後者は日本における自由民権運動の理論的支柱となりました。

単に哲学書の概要だけを知りたいなら、検索すれば簡単に済みます。しかし、カントやミルの生きた時代状況に思いを致しつつ、彼らの思考を現代の問題として受け取ろうとすれば癖のある言葉を丹念に拾っていくしかありません。この拾い集める行為をドイツ語でlesen（読むの意もあり）と言いますが、これからも学生諸君とともに続けていくつもりです。

談話室

「痛くなるのが嫌なんです」

看護学部　准教授　舘山　光子

痛みが怖くて動きたくない術後患者にどう離床を促すか…看護学部2年の学生が「成人看護学Ⅱ」の演習で取り組んだ課題です。

現在の医療現場では、エビデンスに基づいた周術期管理法であるERAS（enhanced recovery after surgery）が浸透し、手術による身体機能の低下や術後合併症（無気肺・血栓症・イレウスなど）を予防するためにも、可能な限り早期の離床が推奨されています。これまでの授業では、手術の部位や術式による特徴、既往歴や各種検査データからリスクの高い術後合併症の予測や予防のための看護を学び、学生たちは早期離床の必要性も十分に理解しています。

今回の演習では、患者役学生の迫真（?）の演技に戸惑いながらも、離床の意義を理解できるよう丁寧に説明し、痛みが増強しないように身体の起こし方を工夫したり、ふらついて転倒しないよう身体を支えたり、「トイレまで歩いてみませんか」と提案してみたり、各自が考えてきた援助を行うことができていました。原理・原則はもちろんありますが、知識と技術をフル活用して、患者の状況に合わせた援助を創造する力が看護師には不可欠です。「こうすれば楽かな?」「それよりもこうすれば?」とグループ内で議論しながら進める様子は看護職としての自覚を感じさせる頼もしいものでした。

2019年の4月から本学に着任し、前期から2年次の授業を担当してきましたが、今回の演習を通して学生たちの成長を実感することができました。3年次の臨地実習ではさらにレベルアップした学生たちを見るのが今から楽しみでなりません。

看護学部田中真実講師が受賞される

学長　吉岡　利忠

田中講師は2019年8月2日に名古屋大学野依記念学術交流館で開催された第61回日本平滑筋学会総会で学術交流優秀賞（ポスター賞）を受賞された。研究タイトルは「冠攣縮性狭心症患者由来iPS細胞を用いた病態の解明；p122RhoGAP/DLC-1とphospholipase Cの役割」である。冠攣縮性狭心症とは，心臓の表面を走行する比較的太い冠動脈が一過性に異常に過収縮を起こし心筋虚血を生じる病態で、胸痛や圧迫感などの症状を引き起こし、その危険因子として、喫煙、不眠、過労、ストレスおよびアルコールの飲みすぎなどである。本研究は、iPS細胞の革新的技術を用い、冠攣縮性狭心症患者由来iPS細胞から作製した平滑筋細胞を使用し収縮の評価を行い、その結果、細胞内へのカルシウム流入が亢進しイオンチャネル（TRPC6）が影響していることを初めて証明した研究である。研究自体は彼の前任地であった弘前大学大学院医学研究科循環器腎臓内科学講座で行ったものであるが、現在も研究が継続している。本研究結果は臨床現場に還元されるものと考える。歴史のある本学会での受賞は本人のみならず本学にとっても誇りとするところである。

第15回看護学部リカレント教育を終えて

看護学部　教授　大瀬　富士子

令和元年度リカレント教育は、盛会のうちに終了することができました。リカレント教育は基礎教育終了後、生涯にわたり教育と他の諸活動を交互に行う教育システムといわれています。本学では看護学部の開設以来、地域貢献の一つとして看護師などが、教育機関を利用し学習する機会として行ってきました。

教育プログラムは現場の看護職の希望が「看護研究」にあることから、看護研究を中心においています。リカレント教育を開催した初年度からの一貫したテーマでもあります。毎年参加される方、また新たに参加される方がそれぞれどのような期待をされておられるか、研修後の参加者アンケートの内容を参考にして企画しています。

本年度のテーマは学会発表まで繋げたいと考え、「看護実践から見つけよう研究テーマ!～学会で発表しよう～」としました。参加者は延べ85名（昨年35名）で、プログラムは連続して参加できなくても研修の目的が達成されるように計画をしました。研修会案内は県内全域の医療施設、保健所などにも送付し、受講は事前申し込みあるいは当日参加も可能としました。受講者は弘前市内のみならず、東青地域や上十三地域、三八地域などの市外医療機関に所属する方々が参加されました。

1回目は、本学田中真実講師により「なぜ?」から始める研究」と、大瀬より「実践に結びつく文献検索」と、八戸市立市民病院母性看護専門看護師古屋敷智美氏により「妊娠、出産、産後へと切れ目のない支援」をテーマにおこなわれました。2回目は、本学柳澤尚代教授により「現場で役に立つ質的研究のすすめ方～グループワークを通して質的データを分析してみませんか～」と、本学土屋陽子教授により「糖尿病患者への透析予防指導の実際と難しさ～指導効果を上げるには～」をテーマにおこなわれました。3回目は、本学館山光子准教授により、「現場で役に立つ量的研究のすすめ方～失敗しないアンケートの作り方・まとめ方～」をテーマにおこなわれました。

終了後のアンケートでは有意義であったと答えた方が、1回～3回では半数以上を占めており、「とても勉強になりました。」などの感想を多数いただきました。

大学ができる地域貢献の一つとして、地域に愛され、人材を活用していただけるように、受講者からいただいた感想を次年度に活かしていきたいと考えております。

「地域総合文化研究所」講演会報告

文学部　教授　入江　英弥

本学「地域総合文化研究所」では、昨年（二〇一九）十一月三十日（土）に弘前市民会館大会議室を会場にして、「弘前藩の古武術」と題する講演会を催した。これは、「平成三一年度　大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金対象事業」の一つとして行った。ここにその内容をご紹介したい。

「概容説明」「実演」「座談会」の三部構成で実施した。

最初に、本研究所客員研究員・北東北無形文化遺産実践研究協会の下田雄次氏が「概容説明」を行った。「剣術」が気配を消すのに対して、「剣道」は足を踏み込んで気を出すなど、その違いを対比的に説明された。

次に、弘前市無形文化財・卜傳流剣術の小山隆秀氏、弘前藩伝・林崎新夢想流居合稽古会会長の外崎源人氏、「修武堂」の方々が「実演」を行った。その際に、剣術にとって「間合い」が重要であること、戦いの場で「刀を持って平然と前に進めるか」などの解説があった。

最後に、下田氏が司会となって、実演を行った講師の方々による「座談会」を催した。今回は、「武術の継承」を主要なテーマとした。最初に、武術を継承するために、いかに取り組んでいるかが話題となった。小山氏が、武術であることから腕を磨くことが求められ、そのためには「もまれる環境」が必要だと痛感した。そこで、さまざまな武術の人々と交流するための団体「修武堂」を二〇〇四年に立ち上げて、交流を図っていることを述べられた。

次に、武術の継承にとって重要な「型の稽古」が話題となった。外崎氏から、型の稽古がいかに大切であるかについて説明があった。小山氏からは、代々試行錯誤して発見されてきた身体の使い方の法則があり、目に見えるようなものではないだけにそれを相手にわからせることが難しい。そのために「型」が作られてきたのではないかと述べられた。

実際に刀を抜いての試技があり、その迫力に圧倒された。また、実演と解説がセットになっていたため、初めて目にする者にとって大変わかりやすい内容だった。なお、本講演会の内容は、本研究所編『地域学』第十六号に掲載される予定である。詳しくは、これをご覧いただければと思う。

4年間の実習を通して

看護学部4年　渡辺　歩夢

4年間の実習を通してコミュニケーションや専門的な知識や技術を多く学びました。1・2年生の実習では、主にコミュニケーションや看護過程の展開などを学んでいきました。患者さんから得た情報をどのように分析し、様々な視点から考えられるリスクを患者さんの個別性を踏まえて計画・実施・評価をしていきました。領域別になると専門性が高くなり、患者さんの既往歴や生活背景を踏まえながら、知識がより重要になっていきました。指導看護師さんからの質問に答えられるように勉強し、自分のわからないところは、ここの部分がわからないとはっきり伝えることでアドバイスをいただいたりするように努力しました。

実習を重ねていくにつれて記録類にも自信がついていくようになり、当初は不安だった実習も楽しくもっと知識や技術を高めていきたいと考えるようになりました。私は特に4年間の集大成である統合実習が印象に残っています。統合実習では、複数の患者さんを受け持ちします。それまでは一人の患者さんを受け持ちしていきましたが、統合実習では同時に複数の患者さんの状態を把握していかなくてはなりません。受け持ち患者さんは意思表示をするのが難しい患者さんであったので、とても観察力が重要視されました。患者さんから表出される少しの表情の変化やバイタルサインの変化、様々な視点から考え表出する意図を理解しようと必死になり、一年生で学んだコミュニケーションの基礎に戻り学びを深めることができました。

この4年間で学んだことを糧にこれから看護師として働くにあたり学んだことを生かし、さらに勉強に励み知識や技術を身につけ、患者さんや家族の方に寄り添い支えていけるように頑張っていきたいと思います。

～看護学実習を終えて～

看護学部4年　髙木　美緒

私が3年次～4年次に行った領域別看護学実習と統合実習で学んだ1つ目のことは、患者様の理解度に応じたコミュニケーション方法や関わり方でした。小児看護学実習では患児との会話の時に「はい、いいえ」で答える会話を行うことが多く、その内容で私は患児が病気について理解していると判断をしていました。しかし実際には患児がどこまで病気について理解しているのかが十分にはわかっていませんでした。また、どのように患児に関わっていけばよいのか不安もありました。この実習では、患児の理解力に応じた会話だけでなく、実際に自由な発言を引きだすようなコミュニケーションについて工夫を行うことで、個別性がある看護計画を立てることができたのではないかと感じました。また、精神看護学実習では、自分たちが日頃の会話で意思疎通が可能であることも、疾患を抱えた患者では難しいこともありました。意思疎通が上手く図れないために、どのようにして意思疎通を図ればよいのかがわからなくなることもありましたが、無理に会話をしようとせず沈黙を活用する、そばで見守る、遠くから見守るなど、相手のパーソナルスペースを理解し、適度な距離感を保つことも大切であることを学びました。

2つ目は事前学習の重要性です。実習前には各領域から課題が出ます。実習期間の初期は、実習前に課題を終わらせることで精一杯でした。4年生になり実習期間の後期に入ると、実習と並行して国家試験の勉強も行うようになって、どの領域もすべて関連づいていることが理解できるようになりました。それによって計画的に事前学習を行うが可能になり、その重要性も実感しました。また、実際の看護をイメージした学習をすることは、実習の事前学習とともに今後の国家試験の勉強でも大切です。そのためにインターネットを用いて実際の看護をイメージしやすい写真や動画を見つけることが重要であることも実感しました。

最後に看護学実習では看護師の日頃の業務や行動を見ることや、担当教員への相談と担当教員からの的確な助言だけでなく、実習前にはあまり話したことがなかったメンバーとも話す機会が多くなり、学びが多かった1年間の実習期間でした。これらの学びを糧に就職後も頑張っていきます。

教育実習を終えて

文学部　日本語・日本文学科4年　工藤　佑華

私は、五所川原市立五所川原第二中学校と、青森県立浪岡養護学校の二校で、教育実習をさせていただきました。

それぞれの実習校でさまざまなことを得ましたが、共通して「生徒をよく見ること」の大切さを学びました。

現場の先生方の授業を参観させていただくなかで、教科ごとに指導方法がさまざまあることに気づきました。生徒の反応を見て、アプローチの仕方を変えたり、予想外の生徒の回答に返答する豊富なバリエーションを備えたりしなければならないと感じました。特別支援学校は、障害が多種多様で、程度や現れ方も一人ひとり異なるので、実態把握が授業づくりの鍵を握るということを確信しました。また、休み時間や部活動で積極的に生徒とコミュニケーションを図るようにしました。授業では見られない一面や、生徒の良さ・個性を発見することができました。これらを生かして、授業を組み立て、授業実習をした結果、回数を重ねるごとに、前回より良くなっていくこと、生徒の成長を実感することができました。

このように、先生方の授業を通して生徒をよく見ることの大切さを学びました。これも重要ですが、一番大切なのは、生徒から学ぶということだと思います。教育実習を通して、生徒と接するなかでたくさんのことを学びました。生徒から思いがけない発想や意見が次々と出るため、毎日が驚きと発見の連続でした。生徒に教えることも大切だと思いますが、それ以上に、生徒から学ぶという意識を持つことが何よりも大切だと感じました。

私にとって教育実習での日々は、かけがえのない思い出です。そして、教育実習に全力で臨むことができたのは、お世話になった先生方や生徒のみなさんのおかげだと改めて感じています。

4月から、私は、本当の教員として教壇に立ちます。感謝の気持ちを忘れず、教育実習で学んだことを生かし、今後も努力し続けていきます。

社会福祉実習を終えて

社会福祉学部3年　白尾　あゆみ

私は、主に就労移行支援事業での活動に同行させていただいた。就労移行支援事業では、利用者が抱える家族の課題や、生活リズムの改善などの生活面の課題に対して、職員が情報を共有したうえで、それぞれの利用者に対する支援プログラムを作成するということを学んだ。具体的には、友人・家族関係に悩みを抱えている利用者に対して、定期的に併設事業所である地域活動支援事業を利用していただくことで、精神面での余裕の確保を促すなど利用者への関わりは多岐にわたるが、それぞれの利用者に合った支援を行っている。私が作成した個別支援計画では、家族に障害理解のきっかけを促すとともに、利用者自身が家族に対してどのように思いを伝えたら伝わるのか理解していただくことを目標に設定し作成した。話すことよりも書くことの方が得意であるという利用者の強みを生かして利用者が母親宛に手紙を書くことにした。手紙を書くにあたって、まずは手紙を書いたことのない利用者に対して見本となるような手紙を私が利用者宛に書き、さらに手紙を書くポイントを箇条書きにまとめ、わかりやすく伝えることを心がけた。また、受け取った相手がどのように感じるのかを考えずに文章を書いてしまう課題に対しては、まずは利用者自身に書いていただいた言葉の言い換えをしていただき、利用者が思いつかないときには私が提案するという形で支援を行った。モニタリングの結果では、利用者が母親に手紙を渡すことはできたが、障害理解のきっかけにしていただくことや、利用者自身に思いの伝え方を知っていただくことについては、あまりよい反応を得ることが出来なかった。時間が限られた中での支援にもどかしさを感じるとともに、支援者として利用者に支援の目標を理解し、達成していただくことの難しさを感じた。

実習を通しての感想としては、利用者の方々と積極的に関わろうと試みたものの、支援者としてではなく〝いち友人〟のような関係を形成してしまった。そのため、これからは支援者として「傾聴」「共感」といった技法について実践に繋いでいけるように、事後学習に努めていきたいと思う。

社会教育実習を終えて

文学部　日本語・日本文学科3年　田畑　七海

私が参加した社会教育実習では、一か所で一定期間の実習を行うのではなく、一日ないし二日間という短い期間の実習を複数の公民館等施設で行うというものでした。その時ごとに人間関係を築かなければならず、緊張することも多くありました。各公民館について理解を深めることも、長い時間をかけてじっくり、ということができない為、できるだけ積極的に色々な方にお話を伺うことで、それぞれの公民館や地域について知るよう努めました。親身になって回答してくださる方々ばかりで、興味深いお話をたくさん聞くことができました。そして、複数の公民館でそれを繰り返しているうちに公民館ごとの様々な違いに気付くことができました。地域の特色や課題がそれぞれあり、それらを解決するための方針も様々でした。例えば、高齢者が多い地域の公民館では、公民館で事業を行うにも、公民館までの交通手段がないという状態にあるため、自家用車を持っている人たちに呼び掛けて相乗りしたり、宿泊施設にシャトルバスを出してくれるように依頼したりと、様々な方面への声掛けによって解決しているといいます。他にも、地域の子どもたちとの距離を普段から縮めてその信頼関係を事業に生かしている公民館や、地域にある様々な団体に声をかけることで規模の大きいイベントを作り出している公民館など、それぞれ事業を行う上での様々な障壁を独自の方法で解決していることがわかりました。

いくつかの公民館で実習をさせていただいたことで、より社会教育事業やその意義への理解を深めることができました。また単に「資格を取るために必要な実習」というだけでなく、実際に公民館のイベント等に参加することで現場を知る貴重な機会であったため、実地でしか学ぶことができないことをたくさん吸収することができました。お世話になったたくさんの方々のためにも、今回の実習で培った経験を自分なりに還元していきたいです。

精神保健福祉実習を終えて

社会福祉学部4年　工藤　桜佳

私は、精神科病院と障がい者生活支援センターの2か所で実習をさせて頂きました。そして実習を通して改めて、「ソーシャルワーカー」という職種の魅力ややりがいを感じました。

精神科病院の実習において、ソーシャルワーカーの方と患者さんの面接場面に同席させて頂きました。患者さんのお話をじっくり聞き、患者さんの困りごとや不安な気持ちに寄り添い、適切に情報提供をしたり、多職種のスタッフと何度もカンファレンスを行っていることが印象的でした。また患者さんだけではなく、そのご家族の方にも丁寧に説明をしたりと、私もこんな支援をしたいと思う場面がたくさんありました。

障がい者生活支援センターの実習では、「傾聴」することの大切さを学びました。傾聴する際には、目の前にいる利用者の方がどんな方でどんな課題を抱えているのか、どんな背景を持っているのか、利用者の方の言葉だけではなく周りの環境にも目を向け、言葉の背景にはどんな想いがあるのかを想像する、想像力を持つことがソーシャルワーカーとして大切であると教えて頂き、印象に残っています。

実習では、患者さんや利用者の方との関わりで失敗したこと、その失敗から学んだこと、また患者さんや利用者の方の言葉に励まされたり、温かい気持ちになったりと様々なことを感じ自分自身の成長に繋がりました。また自分自身を見つめ直す自己覚知もたくさんすることができました。そして「対人援助」という支援の難しさをたくさん感じた反面、患者さんや利用者の方との関わりから教えて頂いたソーシャルワーカーのやりがいや、「ありがとう」などの言葉の重みもたくさん学び、充実した実習期間でありました。失敗したらどうしようと実習前は実習に行くことがとても不安でしたが、実習を重ねるごとに失敗してもいいからやってみようという気持ちに変化していきました。実習で学んだことを軸にし、これからに生かしていきたいです。

太宰治の足跡を辿って

文学部　日本語・日本文学科1年　千田　侑加

9月28日に、私は初めて「文学散歩」に参加しました。「文学散歩」というのは、様々な作家にゆかりのある場所を巡るという、国語国文学会が企画したイベントです。オープンキャンパスでこのイベントの存在を知ってから、私はぜひ参加してみたいと思っていました。

今年の「文学散歩」のテーマは、「太宰治」です。太宰治（本名津島修治）は現在の五所川原市に誕生した作家で、『人間失格』『斜陽』『走れメロス』『駆込み訴え』、『富嶽百景』『女生徒』等で名声を馳せています。

今回はそんな太宰治に関連した場所として、斜陽館や旧津島家新座敷、金木山雲祥寺や芦野公園、青森県近代文学館を回りました。

旧津島家新座敷には太宰治の書斎があり、解説員の方から「そこに座ると文章力が上がる」というジンクスを聞いた人たちが、代わる代わる座っていました。私も太宰治のように胡坐を崩した状態で右膝を肘置きにし、執筆をしていた太宰治の視点に立ってみたりしました。

金木山雲祥寺では、太宰治も見たと言われている地獄絵図を見ました。そこには様々な拷問を受けて血を流している多数の死者たちが描かれており、悪行を犯した人間の末路がどうなるか改めて目視しました。

更に、斜陽館の文庫蔵展示室や青森近代文学館に置かれた太宰治の直筆原稿から、太宰治の筆跡がどんなものだったかを知ることができました。そして、農民一揆防止用の高い塀に囲まれた生家からは、太宰治がどれほど裕福で格式高い子供時代を過ごしたかが伝わってきました。食器や家具も見ることができるので、太宰治の生活を想像することができます。他にも、太宰治が結婚するまでの経過や太宰治の兄弟の話等を聞くことで、太宰治の人間像について理解を深めることができ、実りあるものだと感じました。

私は元々、宮沢賢治記念館のような作家に関連する場所に行くのが好きなので、また機会があったら「文学散歩」に参加しようと思いました。

ブックハンティング開催

図書館司書　柴田　拓也

世間では若者の読書離れが話題となっていますが、本学学生も例外ではないようです。近年の本学図書館の利用状況は、20年前と比べると来館者数・貸出冊数ともに約3分の1にまで減少しています。

そこで、読書や図書館に興味を持ってもらえるような企画として今年初めてブックハンティングを開催しました。ブックハンティングとは図書館に備えて欲しい図書を、学生に書店で選んでもらうイベントです。購入した図書を読んでもらい、簡単な紹介ＰＯＰとともに図書館で展示します。今回はジュンク堂弘前中三店で開催し、5名の学生が参加しました。1人15、000円という限られた予算ではありますが、購入できる図書の分野の制限はもうけず、学部以外の分野や一般書、マンガなど自由に選んでもらいました。

他大学では以前から頻繁に行われている企画であり、学生目線の選書が学生の共感を得て、高い貸出率となっているようです。本学では以前から「勉強以外の図書がない」、「息抜きに一般書が読みたい」などの声がありましたが、揃えることができませんでした。今回のブックハンティングで少しでも学生のニーズに応え、読書の習慣化や図書館に興味を持つ学生が増えることを期待しています。

「ブックハンティングに参加して」

看護学部　看護学科3年　大湯ひかり

学生の図書館利用を推進するために、本屋に学生が足を運んで学生がお勧めする本を選ぶというブックハンティングを行った。学生の目線で興味あること、今まで読んだ本の中で面白かった本などたくさんの学生に興味をもって読んでほしい本を探した。本は小説でもマンガ本でも写真集だったり、学校の図書館に置くのに適しているのであればどんな種類の本でもいいらしく、興味あるもの自由にそれぞれ選んでいった。私は事前に何にするのか本を決めていたが、実際に本屋に行って本を探してみると、作者の名前を知っていてもまだ読んだことのない本や、話題になっていた本など気になった本が目に入り、決めていた本にするか違う本にするのか悩んだ。

私が選んだ本は『十二国記シリーズ』だ。エピソード0を踏まえて、全15巻の長編ファンタジーだ。物語は一見中華ファンタジーのようだが、現代日本がでてきたり、神獣や妖魔などを織り交ぜている。作品の特徴としては全15巻全て話が繋がっているわけではなくて1巻ずつ（タイトルによって上下あり）で話は終わっている形になっている。メインキャラクターの心理面が細かに描写されているのはもちろん、少しの場面にしか登場しないキャラクターも細かに書かれている。裏切られたり、命を狙われたりしながらもやさしい人と出会い、自分と向き合い、迷いや葛藤をしながら成長していくような物語になっている。少し前に新作が18年ぶりに発売になって話題になった本でもあるので興味があったら読んでみてはいかがでしょうか。

弘前学院大学シンポジウム「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」を終えて

文学部　日本語・日本文学科　教授　鎌田　学

2020年1月11日（土）13時から15時30分まで、本学礼拝堂にて開催された。学内外からの来場者数187名と大盛況であった。今回のテーマ「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」に対する世間の関心の高さを伺い知ることができた。

まず本学地域総合文化研究所所長、文学部教授畠山篤氏が、琉球文化とアイヌ文化の親近性について言及しつつ開会の挨拶を述べた。

次にシンポジウム冒頭、本学文学部教授今村かほる氏が「危機言語としてのアイヌ語」と題して、アイヌ語を含めた世界の危機言語について現況を解説。シンポジウム開催の趣旨説明を行った。

それを受けて、「アイヌ語とアイヌ文化」という題で、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授北原次郎太氏が基調講演を行った。講演冒頭にアイヌ語で自己紹介されたが、それを聞いた聴衆一同は、アイヌ文化に対する興味を相当掻き立てられた様子であった。狩猟採集農耕がミックスした生業、信仰そして儀礼などを多面的に論じ、イナウ状木製品の世界分布を取り上げて、アイヌ文化と東北文化をグローバルな視点から位置づけた。

次に、本学文学部長、教授井上諭一氏が「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」と題して、野田サトルの『ゴールデンカムイ』が「高い到達点」に達していると報告。手塚治虫の『シュマリ』等との比較を通して語った。また、「非農耕的文化」を描く現代の漫画作品『山賊ダイアリー』『クマ撃ちの女』にも言及した。

そして、岩手大学教育学部教授大野眞男氏が「アイヌ語地名と菅江真澄」というタイトルで「報告2」を行った。菅江真澄が蝦夷語地名研究と蝦夷人・蝦夷文化に言及した部分を時系列に並べ、その後の研究者の論考を記述、紹介された。

最後に、聴衆から提出された幾つかの質問カードに対して、発表者からの見解を聞くことができた。しかし、各登壇者の発表時間が短かった点、また、フロアからの「生の声」を拾いあげて質疑応答する時間的余裕がなかった点は、今回のテーマが好評だっただけに遺憾であった。

「hug workサテライト事業に参加して」

社会福祉学部　社会福祉学科　2年　山本みなみ　藤田和香那　野呂汐里　沢目晏由

2019年12月18日にhug workと弘前大学教育学部附属特別支援学校の高等部カフェ班の方達がコラボしておこなったサテライト事業に参加しました。

当日は、hug workのボランティアスタッフとして、障害者事業所の方が作ってきてくれたお菓子などをどのように作っているのか、おすすめのお菓子などの紹介しながら販売をおこないました。また、高等部カフェ班の方々とは、一緒にコーヒーやリンゴジュース、チョコを大学の中にいる先生方や学生に配りました。

普段の大学生活では、高等部の生徒、事業所の利用者の方と大学生が接する機会がないため、最初は緊張しましたが、楽しみながら有意義な時間を過ごすことができました。サテライト事業に参加し印象に残っていることは、高等部カフェ班の生徒の方々が私たちとの会話を楽しんでくれたことです。会場では、コーヒーの配り方、トレンチの持ち方などを教えて頂き、他にどのような活動をしているのか、またラッピングのデザインなどや運営方法などについても、情報交換することができました。

また、サテライト事業をとおして役割分担をすることの大切さを改めて学ぶことができました。ラウンジに響き渡るほど大きく明るい声で先生や学生にコーヒーを配る生徒、丁寧にコーヒーを淹れる生徒に分かれていました。個々の特性に応じて作業を分けることで、一人ひとりの素晴らしい個性が引き出され、「障害を持っていてもできることはたくさんある」ということを感じることができました。

今後は、社会福祉学部の学生だけでなく、文学部や看護学部の学生と一緒に参加していきたいと考えています。障害の有無に関わらず、誰もが住みやすい地域に変えていく一歩として、まずは学部を超えて障害に対する理解を共有していきたいと考えています。